生活科教育部会

「子どもが生き生きと学ぶ生活科」

～生き生きと学ぶ子どもを育てる指導と評価のあり方～

Ⅰ．研究の内容

1，研究の具体的な内容と方法

東山梨地区生活科教育研究部会では，県のテーマを受けて，その基となる「気づき」を中心とした「評価」に視点を当てた研究を進めていくことを部会のスタートにあたって確認した。そして，サブテーマ「生き生きと学ぶ子どもを育てる指導と評価のあり方」に沿って，具体的な評価規準が授業の中でどのように扱われているかについても検証してきた。

体験や活動を通して学ぶことの多い生活科において，教科の特性に応じた知識や技能を身につけさせるためには，「育てたい力」を明確にしておくことが不可欠である。そして，そのねらいに基づいて子どもたちが表現した「主体的な学び」をどのように評価していくか，また指導にどういかし活動につなげていくか，が大切だと考える。育てたい力が確かに身についていつか見取る手段や方法を共有することにより，子どもたちの学習意欲が向上し，より生き生きと学ぶ生活科が実践できると考える。

研究を進めるにあたり，授業実践の紹介を行い情報交換することにより授業にいかしたり，児童の作品やワークシートなどを持ち寄ることにより評価のあり方について学び合ったりした。また「生活科と総合的な学習との関わり」について講師を招いて学習会を行い，上の学年とのつながりや学習の進め方などを学んだ。

2，研究授業

（1）第1学年「ともだちいっぱい　おもいでいっぱい」

（授業者　大和小学校　岩下　亜希子教諭）

入学前の保育園生を招き，学校の良さや楽しさを伝える会を開くことにより，自らの成長についても気づくことをねらいとして取り組んだ授業実践である。

研究授業では，本番の会（「大和小がわかる会」）に向けグループで準備してきたことをお互い発表し合い，良かった点や改善した方がよい点について伝え合う活動が行われた。

①授業実践から学んだこと

（相手意識について）

・「保育園の子に喜んでもらえる」という意識をもたせ，計画を立てたり活動をしたりしていくことが大切である。→保育園の子が喜んだ様子が児童の自信を育てる。

・クラスメイトに発表を聞いてもらう時には「聞くときのポイント」をおさえ，良かった点や改善点をみつけさせたことが良かった。

（目的意識について）

・「大和小がわかる会」というネーミングが目的意識を表していた。発表内容も，「保育園と学校との違い」という視点で児童に考えさせ，決定していた点が良かった。

（アドバイスカードの用い方）
・「○○がよかったよ。」と言われていた児童は笑顔であった。→活動の良さ
・書いている時間が長くかかるので，待っている子たちは，自分たちの発表の良かったところを考えているとよいのではないか。（「次回に頑張りたいこと」を書く等）
（表現方法について）
・「どうやれば分かりやすい」か子どもたちに話し合わせ考えさせたところが良かった。様々な表現方法も経験させ学ばせる中で児童に決定させたい。
（その他）
・単元を通して，教師が子どもにかける言葉や支援が常に「子どもの思いにつなげていった」ところが良かった。
・少人数の中での授業の大変さを感じたが，クラスの４人がそれぞれ自分の意見を言い合えるところが良かった。学習規律や日々の積み重ねの成果である。
②授業実践からわかったこと
○アドバイスカードの有効性→子どもが喜びを感じながら学習でき，自己肯定感がもてるようになる。次回への意欲につながる。
○相手意識や目的意識をもたせることの重要性→ねらいを達成するために必要な事項である。
○子どもの思いをつなげる指導の有効性→子どもたちに考えさせたり話し合わせたりしながら次の学習活動を仕組んでいくことが，生活科を生き生きと学ぶことにつながる。

Ⅱ．成果と課題
【成果】
○実践紹介では，各校の規模や環境，地域の実態を考慮しながらの様々な事例が出され，他校の実践が大変参考になった。
○ワークシートを追っていくことにより，活動の流れや児童の変容の様子，指導や評価の様子が分かり，参考になった。
○講師を招いての学習会では，総合的な学習とのつながりや活動の進め方・支援の仕方等学び得ることができた。子どもの学習意欲とテーマ設定の仕方やそれまでの過程は生活科につながるものであり大変参考になった。→生活科を総合的な学習との共通点や連続性という大きな視点で考えることができた。
○全体での授業案検討の時間が限られている中，授業者の先生にはご苦労いただき学びの深まる授業を提供していただいた。今後も学び合うことのできる授業研究を継続したい。
【課題】
○授業の進め方や活動内容についてが提案や情報交換の主となることが多かったので，テーマである「評価」についてもっと焦点を絞って討議が進められるとよかった。
○研究のテーマは，県の流れから来年度も変えずにいいと思うが，研究の具体的な内容は「自然の関わり」「人との関わり」等方向性を変えていってもいいのではないか。また，テーマや単元を何か一つに絞って決め，研究を進めて検証するとよいのではないか。「保・幼・小の連携」や「スタートカリキュラム」についての研究も行えるとよい。

（部長　志村　貴美子）